

10. 取組内容の進捗状況(令和4年度)

【会津大学】

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連、教育改革関連

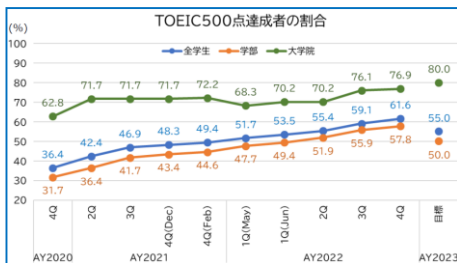
1. 学生の語学レベルの測定・把握・向上のための取組

7年目中間評価結果を受けて本学外部委員から多くの助言があり、教職員一丸となり全学を挙げた学生の英語力向上の取組が加速した。その結果2023年1月末日時点で、学部生および全学生の割合において目標値50.0%を超えた。(図1)

TOEIC730点以上の割合は、学部生12.2%、大学院生38.6%、全学生17.4%である。

様々な取り組みの中でも、英語選択科目でTOEIC-IP受験を必須化したことと、TOEICアドバイザーを委嘱し、学生の英語に関する相談および指導を行ったこと、学部1年生の英語科目において4技能(読む、聞く、話す、書く)をクラス毎に30分練習したことは、英語能力向上に貢献したと考えられる。会津大学の新生生のTOEICスコアは年々上昇している。

(中央値:SGU採択前340点前後→2022年度新生入生495点 各年5月のTOEICスコア)



(図1) 学生のTOEIC500点達成者割合



(図4) 学生に配布中のチャーム

2. 外国語のみで卒業できるコース(学部ICTグローバルプログラム全英語コース(ICTGコース)の在籍者数

ICTGコース在籍者数は98名(留学生50名、日本人在籍者48名)(2023年3月31日現在)(図5)

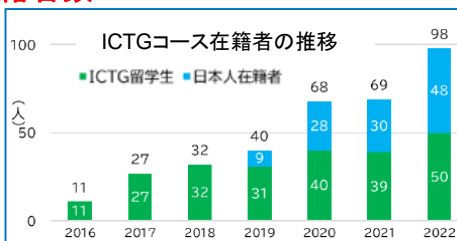
日本国籍を有する学生がICTGコースに入学をしている(2022年入学者18名のうち4名)。全英語でコンピュータサイエンスを学べる環境に魅力を感じている。

出願者数は増加しており、コンピュータサイエンスを英語で学べる大学としてますます多くの留学生が会津大学を選択している。

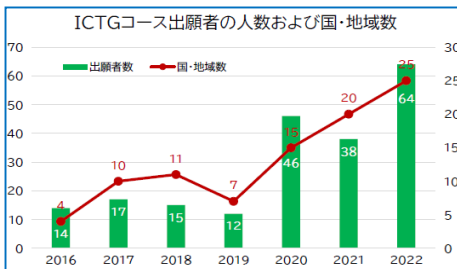
日本人在籍者数を増やすための活動に注力した。パティ、グローバルラウンジ活動、海外派遣説明会の参加者、およびGoBeyond500!チャーム獲得者への積極的な呼びかけ、さらに1年次の英語クラスにおいて口頭説明、年2回の英語クラス体験授業の実施等により、21名が2023年4月に登録となる。

英語によるクラスを自ら志望する学生が増えた。

日本人学生が英語能力の向上や大学院進学、グローバル環境での就業を見据えて、ICTGコースに在籍し、英語で専門科目を履修している。



(図5) ICTGコース日本人在籍者の推移



(図6) ICTGコース出願者の人数および国・地域数

3. 取組の発信

会津大学SGU事業成果リーフレットを作成した。①会津大学が目指す姿②会津大学SGU事業のプログラムで成長した学生達③コロナ禍における会津大学のグローバル教育への取組④会津大生の英語力向上への取組⑤奨学寄付金のご報告、で構成されている。https://u-aizu.ac.jp/sгу/info/media/post_42.html、https://u-aizu.ac.jp/sгу/en/info/media/post_42.html 250部を作成し、公立大学や工学系大学をはじめとする各高等教育機関、グローバル企業、地域企業、地域団体等100か所以上に配布した。またWeb上にも日英両言語にて公開を開始した。その結果、地域の経済団体より会員企業120社に配布したいと申し出があり、次年度配布することになった。さらに1000部の増刷を決定した。(図8)

英語版大学PR動画を作成し公開した。コンピュータサイエンスを英語で学修する留学生の声を発信し、世界にコンピュータサイエンスの魅力伝えた。<https://www.youtube.com/watch?v=Pc2rjt4OAmY> (図9)

JV-Campusの個別機関BOXを開設し、大学コンテンツを発信した。

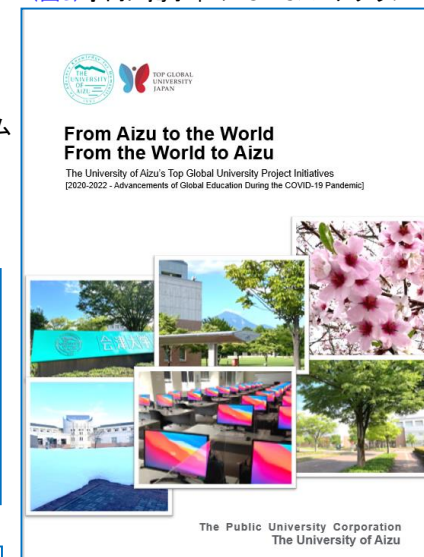
学習総合サイトに会津大学PR記事を公開し、高校生に会津大学のグローバル環境を発信した。



(図2) TOEICスコアが向上した学生の声



(図3) 学内に掲示中のTOEICスコアグラフ



(図7) SGU事業成果リーフレット(英語版)



(図8) SGU事業成果リーフレット(抜粋)



(図9) 英語版の大学PR動画

4. 留学経験者数(表1)

- 海外インターンシッププログラム: 中国ビジネス研修インターンシッププログラム(3名参加)及びベトナムインターンシッププログラム(3名参加)(両方ともオンライン、及び全英語で実施、奨学寄附金で学生負担費用を補助)を実施した。米国シリコンバレーインターンシップを3年ぶりに現地(会津大学拠点である米国シリコンバレーオフィス)で実施し(4名参加)、拠点管理者から開発の指導を受け、現地のエンジニアと技術交流を行った。(大学の自主財源で学費負担費用を補助)(図10)

(表1)日本人学生に占める留学経験者数(2022年度 通年)

(人)	実渡航	オンラインA
合計	18	7
うち学部	17	7
うち大学院	1	0



(図10)米国シリコンバレーインターンシップ

- 海外留学プログラム: 2022年度は、短期派遣(ワイカト大学パスウェイカレッジ(ニュージーランド)、ローズハルマン工科大学(米国))に11名(図11)、中期派遣(ローズハルマン工科大学(米国)、カールスルーエ応用科学大学(ドイツ))に5名の学生を現地派遣した。
- 2020年度に新設した「留学準備のための英語体験プログラム」を継続して実施した。短期・中期の留学や海外インターンシップへの段階的なプログラムとして定着している。

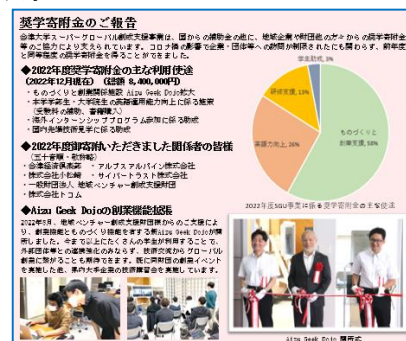


(図11)短期派遣 米国ローズハルマン工科大学

ガバナンス改革関連

5. 自走化及び外部資金の獲得

- 奨学寄附金団体数が前年度より1団体増えて6団体となった。また、3企業から本学SGU事業の実績に対する評価が得られ、前年度より増額していただいた(図12)。奨学寄附金の増額により、ひとつの海外インターンシッププログラムの自走化が確立した。



(図12) SGU事業成果リーフレットより奨学寄附金報告のページ

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

6. イノベーション・創業教育プログラム (ISEP)

- 地域ベンチャー創成支援財団との連携による創業イベントを定期的に開催した。AlpsAlpine社と連携した先進的なセンサキット体験イベントを実施した。また、AlpsAlpine社の中国事業を始めとする海外事業や先端技術等を見学するツアーを実施した(両イベントとも奨学寄附金を活用)(図13)。サイバートラスト社によるエンジニアの資質を説く講演を実施した。寄附講座「ICTベンチャー起業と経営」ではNTTデータ等の上場企業幹部や国際的なジョイントベンチャー企業の創立者の授業を通して、地域創成や経営の実像を学んだ。
- ICT創業トライアルプログラム(2023/2/17~3/3)に5名の学生が参加し、最終プレゼンテーションでは各自の事業プランを金融機関、商工会議所、地元企業の現役ビジネスパーソンに対して発表した(図14)。このプログラムでは経営戦略に関する知識やDXに関する様々な知識が獲得できる他、経営のプロの指導の下、ICTに関する企業の設立を体験することができた。
- 本学で2人目のISEP修了証が学生に授与された。
- ISEP参加学生2名が情報教育事業を展開する会社を創業し、大学発ベンチャー企業の称号を授与された。



(図13)奨学寄附金により実施された先端技術見学会

7. ものづくりコワーキングスペース Aizu Geek Dojo (AGD) の拡大

- 外部資金を活用し、移転拡大工事を実施し、2022年9月29日に開所式を行った(創業に資するセミナースペースの確保)。(図15)
- グローバル創業に係るイベントや海外とのオンラインで接続した海外インターンシップ事前研修、グローバル企業の技術研修会など、15のイベントで活用された。また、活動できるスペースが広がったことにより、学生は複数人での活動が実施しやすくなり、サークル主催の勉強会やハッカソン開催、および起業を目指すグループの創業活動、コンテスト参加のためのチーム開発活動等に積極的に活用している。
- 学生開発品「遭難体験VR」が地元新聞紙に掲載された。(2023/2/24 福島民友)



(図14) 2022年度ICT創業トライアルプログラム

■ 大学独自の成果指標と達成目標

8. オナーズプログラム

- オナーズプログラム認定者数は2020年度14人、2021年度26人、2022年度17人と、ここ数年十数名以上となっており、学内で定着している。また、オナーズ候補者に登録する学生も2020年度30人、2021年度20人、2022年度25人と、ここ数年20名以上となっている。学部・修士一貫型プログラムの認定を受けた学生は本学大学院に進学後、全英語教育を受けている。
- オナーズ制度を利用する学生は、早期に研究室に配属されることをメリットと感じており、2年次から研究と学業を両立させる学生や、大学院進学を意識した学修に取り組んでいる学生が育っている。



(図15) Aizu Geek Dojoでの活動風景